

半日

森鷗外

青空文庫

六疊の間に、床を三つ並べて取つて、七つになる娘を真中に寝かして、夫婦が寝てゐる。宵に活けて置いた桐火桶の佐倉炭が、白い灰になつてしまつて、主人の枕元には、唯々心しんを引込ませたランプが微かに燃えてゐる。その脇には、時計や手帳などを入れた小蓋が置いてあつて、その上に假綴の西洋書があ開けて伏せてある。主人が讀みさして寝たのであらう。

一月三十日の午前七時である。西北の風が強く吹いて、雨戸が折々がたくと鳴る。一間隔てた臺所では下女が起きて、何かこくと音をさせてゐる。その音で主人は目を醒ました。

裏庭の方の障子は微ほのじろ白しろい。いつの間にか仲働が此處こゝの雨戸丈

は開あけたのである。主人は側そばに、夜着の襟に半分程、赤く圓くふとつた顔を埋めて寝てゐる娘を見て、微笑ほゝゑんだ。夜中よなかに夢を見て唱歌を歌つてゐたことを思ひ出したのである。

主人は、今日けふは孝明天皇祭だから、九時半迄には賢所けんじよに集らねばならない日であつたと思ひ出して、時計を見た。自用車で、此西片町から御所へ往くには、八時半に内を出れば好い。ゆつくり起きて、手水を使つて、朝飯を食ふには、十分じふぶんの時間があると思つた。

その時臺所で、「おや、まだお湯は湧かないのかねえ」と、鋭い聲で云ふのが聞えた。忽ち奥さんが白い華きや奢しゃな手を伸べて、夜着を跳ね上げた。奥さんは頭からすつぽり夜着を被つて寝る癖

がある。これは娘であつた時、何處かの家へ賊がはいつて、女の貌の美しいのを見たので、強姦をする氣になつたといふ話を聞いてから、顔の見えないやうにして寝るやうになつたのである。なる程、目鼻立の好い顔である。ほゞいたら、身の丈にも餘らうと思はれる髪を束髪にしたのが半ば崩れて、ピンや櫛が、黒塗の臺に赤い小枕を附けた枕の元に落ちてゐる。奥さんは蒼い顔の半ばを占領してゐるかと思ふ程の、大きい、黒目勝の目をばつちり開いた。そして斯う云つた。「まあ、何といふ聲だらう。いつでもあの聲で玉が目を醒ましてしまふ。」それが大聲で、癩走つてゐるのだから、臺所へは確に聞えたのである。

一體臺所で湯の沸くのが遅い小言を言つたのは誰であるか。こ

れは主人文科大學教授文學博士高山峻藏君の母君である。博士の父が、明治の初年に、同縣の友で好い位地を得てゐた某の世話で、月給十五圓の腰辨當を拜命して、東京に住むやうになつた時から、食ふ筈の肴を食はず、着る筈の着ものを着ずに、博士の學資を續けて、博士が其頃の貸費生といふものになりおふせる迄にしたのは、此母君の力である。博士の父が、ある時世話になつてゐた大官に、洋行といふものは、どの位の金があつたら出來ませうかと問うたら、大官が斯う云つたさうだ。「君は貯金をして息子を洋行させようとも思ふのか知らぬが、そんな冒險な考を出してはいけない。兎角日本人は財産を重んずるといふ思想に乏しい。第一君などの俸給では、食はずに溜めても、息子を洋行させること

は出来ないが、縦よしや出来るとしても、さうして洋行させた子が死にでもしたらどうするのだ。女房をも餓死させては義務が立たない。跡から出来る子供にも、普通教育丈は是非共受けさせねばなるまい。その入費はどこから出る。君の収入で、息子を大學に入れてゐるからが、尋常な遣り方ではない。夫婦氣を揃へて遣つてゐられるのだから、止とめはしないが、これが既に冒険だ。こんな冒険をするのは、子にかかると云ふ日本特有の風習から出てゐるのだが、僕などはそれが好い事だとは保證しかねる。少くも安全な事ではないのだ。」と斯う云つたことがあるさうだ。

母君はさういふ事情の下に、博士を育てあげて、今日こんにちあらしめたのである。此老夫人は、世間に好く有る寢られぬ性たちの人ではな

いが、今でも博士が大學へ通ふのに、講義の時間に遅れてはならないといふので、毎朝自ら起きて湯の世話をする。飯の世話をする。一度時間どの都合で、博士が飯を食はずに出て行くことがあると、母君は數日間悔むのである。さういふ譯わけで、今朝も湯の小言を言つたのである。

奥さんは生しやうとく得寢坊ではあるが、これもまさか旦那が講義の時間に遅れても好いとおもふ程、のん氣ではない。特別に早く起きねばならない朝は、目ざまし時計に、「高い山から」を歌はせて目を醒まして、下女を起す位の事はする。併し兎角母君の方が先に起きる。それは其筈である。母君は頗る意志の強い夫人で、前晩に寝る時に、翌朝何時に起きようと思ふと、autosuggestion

で、きつと其時刻には目を醒ますのである。それと反対で、此奥さんの意志の弱いことは特別である。姫に來た當座の事であつた。博士は交際嫌、宴會嫌、藝妓嫌であるので、大祭日や日曜日には、上方風に辨當を拵へさせて、母君を連れて、道灌山へ往つて、茶店の腰掛で辨當を開いて、自分は持つて來た西洋の詩集か何かを讀んで日を暮すことがあつたが、ある日新夫人をも此遊に誘ひ出した。新夫人は頗る不服であつたが、姫に來た當座で、まだ遠慮勝であるので、兎も角もといふ譯わけで行つた。さて歸つて差向ひになつた時、新夫人が、「どうもあなたのおかあ様と一しよに往くのは嫌いやですから、どうぞわたしに嫌な事をさせないやうにして下さい」と云つた。これを始として、奥さんの不平を鳴す時

には、いつでも此「嫌な事をさせないやうにして下さい」が、*begin*の如くに繰返されるのである。奥さんは嫌な事はなさらぬ。いかなる場合にもなさらぬ。何事をも努めて、勉強してするといふことはない。己に克つといふことが微塵程もない。これが大審院長であつたお父さまの甘やかしたお嬢さん時代の記念である。何等かの義務らしい物の影がさす毎に、美しい、長い眉の間に、堅に三本の皺の寄る原因である。そこで起きねばならぬから起きて見せようといふやうな意志のありやうはない。

奥さんは、「まあ、何といふ聲だらう、いつでもあの聲で玉が目を醒ましてしまふ」と云つた。お嬢さんの玉ちやんは、臺所の聲よりは、お母かあさんの聲が耳にはいつたので、可哀らしい、むく

くくとふとつた拳を二本にゆうと出して伸のびをして、お母かあちゃん讓りの黒い目をぱつちり開あいた。博士が見て、「おう、起きたか、起きたか、好いい子だなあ」と云ふと、伸ばした兩手をお父とうさんの方へ向けて、抱かれる用意のやうな體からだつき附つきをして笑つた。此子に丈優しい詞を掛けることが出来るのが、博士の僅に保留してゐる權利で、母君になぞは、博士は優しい詞どころではない、唯詞を掛けるのも容易でないやうになつてゐる。奥ひさんは乾ひからびて輝ひびの入つた唇を固く結んで、博士の顔をじつと見てゐる。「宜しうございますとも。其子に丈は何とでも仰やい。わたしがあの人ひとの聲がやかましいと云つたのに、成程さうだと合槌あを打つて下さらないのは不平ですけれど、それは特別たふに黙だまつてゐて上げます。」

とでも云ふやうな心持である。奥さんの唇はいつも乾^ひからびて輝^{ひび}が入つてゐる。これはいつも頭から夜着を被つて寝るからである。奥さんは此家に來てから、博士の母君をあの人としか云はない。博士が何故母^なさまと云はないかと云ふと、此家に來たのは、あなたの妻^{さい}になり來たので、あの人の子になり來たのではないと答へることになつてゐる。博士の方でも、奥さんが母君に聞えるやうに、母君の聲の小言を言ふのを、甚だ不都合だとは思つてゐるが、それを咎めれば、風波が起る。それ位の事を咎めるやうでは、此家庭の水面が平かである時はない。そこで黙つてゐる。此晩合が此家庭の雰圍氣である。博士と奥さんと玉ちやんとは七年間此雰圍氣の間に棲息してゐるのである。

臺所のことくが親子三人の寢てゐる次の間に波及して來た。仲働が表庭の方の雨戸を開けると同時に、下女が次の間に湯を取るのである。その又先の茶の間の方で、今ことく音をさせてゐるのは、母君が膳を出してゐるのである。

博士は起き上つた。玉ちゃんは顔をしかめて「うう」と云つた。これは顔を洗ひに一しよに往きたいと云ふので、少しだたを捏ねるのである。「papa はねえ、今日^{けふ}は早く天子様の處へ往かなければならないのだから、先へ起きるのだよ。」と云つてなだめた。そして奥さんに、「起して着物を着せ更へて遣れ」と云つた。不愉快には思つてゐても、用事丈は言ふと云ふので、此家の機關は運轉して行くのである。奥さんが體を半分起すまでには、博士は

次の間へ出てしまった。

博士は地味な銘仙の二枚襲に、鼠色になつた縮緬の兵兒帯をして次の間にすわつた。硝子戸の外は、木芙蓉ふいようの枯株ばかりが鹿の角のやうに残つてゐる花壇で、薄い土を高く持ち上げた霜柱が、所々ざく／＼と崩れてゐる。博士は水指の水を嗽茶碗に取つて、小桶の湯を金盥に取つて、楊枝を使つて顔を洗ふのである。その手續がいかに秩序井然としてゐるので、奥さんが姫に來た頃、お茶の湯をなさるやうだと評したといふことだ。なる程、嗽をしてしまふと、乾いた手拭で嗽茶碗を拭く。顔を洗つてしまふと、湯をバケツに棄てて、手拭を絞つて金盥を拭いて、それに嗽茶碗を重ねる。更に手拭を絞つて手拭掛に掛ける。楊枝も、櫛も、石

鮎も、それ／＼きちんと小蓋の上に載せられる。いかにもお茶の湯らしい。

風通の二枚襲の不斷着に、茶縞銘撰の羽織を引掛けた奥さんが、玉ちやんに元祿袖の友禪めりんすを着せて、連れて出て来たときには、博士は例のお茶の湯の手前が濟んで、「玉、お仕舞が出来たら、御飯に來いよ」と、言ひ棄てて茶の間に往く。茶の間には母君が待つてゐて、博士と玉ちやんとのお給仕をして、一しよに食事をするのが此家の習で、奥さんの膳の背後には、空しき座布團があるのである。奥さんは皆の食事が濟んでから別間で食べる。これは食事ばかりではない。奥さんは母君と少しも同席しないのである。姫に來た當座は、夫婦でゐる處へ、母君がはいつて來る

と、奥さんがつと立つて逃げるといふ風であつたが、段々奥さんが博士のある處へは母君の來ないやうにしてしまつた。博士は毎朝出て、多くは暮れて歸る。歸つた時母君が話しに來ようとする

と、夫婦のゐる部屋へ夜來るのは焼餅やきだと、奥さんが云ふ。奥さんは此説を有力にする爲めに、母君が夫婦の寢床を覗いたことがあると云つてゐる。これは玉ちやんが病氣で夜なかに泣いたので、母君が心配して來て見た時の事を言ふのである。それから

ひところ一頃は、博士が歸つて湯を使ふ所へ、母君が來て用事を話すこ

とになつてゐた。さうすると奥さんが、旦那様の湯殿の世話をしたがる女中はあるものだが、お婆あさんにはそんなのは珍らしいと云つた。母君が困つて、用事のある時は、障子の外の廊下に來

て、時を見計らつて何か云ふと、夫婦のある部屋の外の廊下を、いつもろうくしてゐる焼餅やきには困ると云つた。たまに休日
で、博士が晝間内にゐても、母君が來ると、奥さんが例のつと立
つて逃げる。それも次第に劇しくなつて、「えゝ」と云つて立つ
て、襖をぱつたり締めるやうになつた。そこで母君は、食事の時
にお給仕をしながら話すより外には、博士と話すことは出来ない
やうになつてゐるのである。勿論奥さんはそれを黙つてはゐない。
息子のお給仕をしたがるお母さんかあが何處どこにあるでせうと冷かして
ゐる。奥さんの望どほりに行けば、夫婦と娘とで食事をして、母
君を茶の間に出さない様にしたのであるが、それは博士が承知
しない。妻を迎へて一家團樂の樂を得ようとして、全然失敗した

博士も、此城丈は落されまいといふので、どうしても母君と一しよに食事をする。玉ちやんは子供で、食事を待つてはゐないから、お父さんとおばあさんと食べる時、一しよに出て食べる。そこで奥さんが一人跡へ残ることになつてゐるのである。

今朝は博士が急いで食事を濟ませた。「今日はこれから御所へ参るのです」と母君に言つて起つとき、お仕舞の出來た玉ちやんが走つて來て、お父さんの濟んだのを見て失望してゐると、奥の間から奥さんの聲がして、「玉ちやん、お膳をこつちへ持つてお出いで」と云ふ。同時に仲働が奥さんと玉ちやんの膳を取りに來た。奥の間は博士の書齋である。博士は狭いところが嫌で、内ぢゆうで一番廣い部屋に住んで、そこで爲事しごともする。着更もする。客

をもそこへ通すのである。博士は茶の間を立つて、奥の間にはいる途中で、車は出来てゐるかと問うて、抱車夫の返詞を聞いて、さて奥の間にはいつた。ここには前晩に奥さんの揃へて置いた大禮服がある。博士は金もうるの附いた服などは大嫌で、博士の收入では五百圓の支出も容易でない處から、參内の日はいつも病氣にすることに極きまつてゐたが、つひ此頃やうやうの事で出来たのである。火鉢の側へ、仲働が奥さんと玉ちゃんとの膳を据ゑて置いて下さがるので、博士は膳に塵が掛らぬやうにといふので、部屋の隅の方へ往つて、大禮服の袴ずぼんを穿く。

そこへ玉ちゃんちんが走つて来て、博士がシャツばかりになつてゐるのを見て、「papaのお乳ちち」と云つて取り付く。博士が、「ま

あ、御膳が装つてあるのだから、早くお食べ」と云ふと、玉ちやんは行儀好く膳の前に据わる。

そこへ奥さんがお仕舞が出来て、すうつとはいつて、氣が落着かぬといふ風で、兩膝を立てて、座蒲團の上に蹲んで、火鉢に二本揃へて立ててある火箸を取つて、二たところへ立てて、それを手を載せて焼るのである。關口で買ふ舶來化粧品の功能が見えて、顔は水が垂るやうに美しい。寢起に蒼過ぎた頬も、鶉色に匂つてゐる。玉ちやんの汁かけ飯を食べてゐるのには構はずに、奥さんは先づ溜息を一つ苦しげに吐いて、中單を着掛つてゐる博士にかう云つた。「わたしは玉ちやんを連れて何處か往つてよ。あんな嫌な聲の聞えるところにはゐられないから。」

博士は中單チヨキの鈕ボタンを嵌め掛けた手を停とどめて、聞き耳みみを立てた。この「どこか往つてよ」には、博士は懲りてゐる。いつかもかう云つて、ふいと出て、一人ひとりで湯河原の宿に往つて泊り込んでゐたのを、どこへ往つたか分らぬといふので、博士の内でも、里でも、ひどく心配したあげくに、宿屋の主人の出した葉書が届いたので、里から人を遣つて連れて歸つたことがある。奥さんはかういふ時いつでも玉ちやんを連れてと云ふ。「誰だつて小さいものを内に置いて往くものではありません」と云ふのが、一應の理由である。それから、「世話をするのは嫌だといふあの人なんぞに、子供は頼まれません」と云ふのが、其次に出る。これはいつか博士の母君が、若し預かつてゐるうちに風でも引かせると、何と云はれる

か知れないから預りにくいと云つたのを抑へて云ふのであるが、無論事實ではない。母君は孫娘が可哀くて可哀くて溜まらないのだから、外に遠慮さへなければ、世話がしたくてならないのである。併し博士はそんな理由をば承認せぬ。火鉢の火を絶やさぬやうにして風を引かせぬのも、夜なかに手水が支へて、ううんと云つて、夜着を跳ね退けるはとき、直に目を醒まして、お丸に手水をさせるのも、皆博士が自分で遣つてゐるのであるから、それを手放しては安心してゐられぬ。博士に言はせると、奥さんが玉ちやんを連れて往くといふのは、奥さん丈出るといふと、餘り話が容易く纏まるので、苦情を言つて出て往くのに、張合がなさ過ぎるのだ、玉ちやんを人質に取つて往かうとするのだと云つてゐる。

今朝も博士は、又始つたなといふやうな様子で、鈕を嵌める手をけさ停めて、床の間の置時計をちよいと見た。時計は八時二十分である。博士は手を鳴らして女中を呼んで、「松吉に車はいらないから仕舞つて置いて、使に往く積で待つてゐると云へ」と云つた。そして仲働が立ちさうにするとき、「玉の御飯をよそつて遣れ」と云つた。仲働はお汁かけをこしらへて、玉ちゃんに渡して置いて、立つて行つた。博士は中單チヨキの鈕を半分掛けた儘で、手早く式部職へ當てた所勞の届を書いて、用筆筒ひきだしの抽出ひきだしから、御門鑑を出して、女中を呼んで、車夫に持たせて遣るやうに言付けた。玉ちゃんは御飯をしまつて、自分でお茶を注いで飲んでゐる。

奥さんは膝をいざらせて据わつて、灰を被つた火鉢の火を、火

箸で片々の方へ寄せて、積み上げてゐる。博士は手早く不斷着に着更へて机の前に据わつた。奥さんは火鉢を博士の側へ持つて行つて、博士と火鉢を隔て、向き合つた。

「御饌は食たべないのか。」口を切つたのは博士である。

「食べたくありません。」

「そしてどこかへ行くといふのは本ほん當たうか。」

「玉ちやんを連れて行つても好ければ行きます。」

「玉を連れて行くには及ばないといふのは、いつでも己おれの云ふ事で、分り切つてゐるではないか。一人ひとりでなら行つても好い。それ

もどこへ往つても好いと云ふのではない。いつかのやうに、勝手な處へ往つては行いけないが、紀尾井町のお母かあ様の往つて入らつし

やる逗子へなら往つても好い。」紀尾井町といふのは、奥さんの父君、非職勅任判事阪直人氏の宅の事である。

「それは出来ない相談だわ。お父さんでも、お母さんでも、子供を置いて來るといふことはない。お前に世話が出来なければ、こつちで寢ずにでもするといつてゐるのですものを。そんな事なら、わたしは止めてよ。」

「止めるが好い。一體お母様の聲が聞えてはならないなんぞといふ事はない。」

奥さんの旅行はすぐ止になつた。博士は何もこんな事で、御祭典に參内するのを止めないでも好いのである。大學に出る日なら、博士も止めるのではない。併し黙つて出ると、跡でどこへ往つた

か分らなくなるのに困るのである。玉ちやんを連れて行かれるのが嫌なのである。常の日にもかういふ事は折々あるが、さういふ時には博士は玉ちやんを連れて、近所の法科の教授の所へ片付いてゐる姉の内へ往つて、頼んで置くのが例になつてゐる。

夫婦は暫く黙つてゐる。玉ちやんは床の間に積み上げてある西洋の雑誌を引き出して、繪を見てゐる。仲働が來て、奥さんの方を一寸見ると、奥さんが「今は食べないからお下げ」と云ふので、膳を下げてしまふ。かういふ事は度々あるから、心得てゐるのである。博士は「玉の處へ手てあぶり焙もを持って來て置け」と言付けた。

博士は葉卷に火を付けた。家の中に酒精飲料は一切置かないといふ主義で、同時に二人の女に關係するやうな餘裕はないと云つ

てゐるのであるから、道樂は烟草丈である。それも紙卷は嫌で、高い葉卷は奢おごりだといふので、百本二十圓の Victoria に極めてゐるのである。洋行してから、Havana でなくては本當の味はせぬと云つてゐながら、節儉の爲めに Manila で我慢してゐるのである。奥さんは下唇の剥げ掛かつた薄皮を引張つて、考へ込んでゐる。玉ちやんは繪に見入つてゐる。外そとは風が吹き歇とんで、日の光が障子に當る。一間ひとまの中はひつそりとしてゐる。時々、置時計の音が耳に入る。

「あんな聲の人があるでせうか。」奥さんはかう云ひ出した。

「切角お休で、あなたが御所へ往くのをよして内に入らつしやつても、今に又お午ひるだと、茶の間であの聲がする。わたしはきつと

氣違になつてしまふ。」

博士は眉を蹙めた。「馬鹿な事を。お母様かあの聲は別に優しい聲ではない。あゝいふ男のやうな氣性の方かただから、聲も優しくはない。併しそれがお前に氣になるといふのは、お前の神經だ。こゝへ來た當座、肴町の寺で鉦かねを叩くと、心細くて溜まらないと云つたのと同じ事だ。「暗黒に閉ぢられてゐる夫婦の胸には、sweetであつた蜜月の記念が、電光のやうに閃いて、忽ち消えた。鉦の音が響く度に、花姫御は夫の胸に顔を押し附けて、「わたしあの聲を聞くと、心細くつてよ」と云つたものである。博士はその時妙な心持がしたのだ。此女は神經に異常がありはせぬかと思ふと、怖ろしいやうな氣がした。又思ひ直して、いや、人の神經は色々

だ、工場の調革のやうなものもある、琴の絃いとのやうなものもある、人が聞いては何ともない鉦の音も、悲しく響くやうな神経を持つてゐるのは、憐むべきであるとも思つたのであつた。

「いゝえ。あたりまへ 當前あたりまへの人の聲なら、氣にはならなくつてよ。 ひとつ」

ほり 通の人ではないのですものを。お金はみんな持つて行つて、好い加減にしてゐて、あなたをまで取つてしまはうと思つてゐるのですものを。ちよいと油斷をすると、すぐあなたの側へ来る。あなたにはあれがあたりまへ 當前あたりまへに見えて。えゝ。氣味が悪い。「奥さんの黒い大きな目はかゞやく。」

「又言ふ。人が聞くと氣違かあとしか思はない。おれを生んだお母様ではないか。」博士の聲は頗る激した。玉ちやんは本ほんから顔をあ

げて、ちよいと見た。いつも繰返される問答であるので、博士も始て聞いた時程、腹は立たない。それでも流石に頭には響く。久しく直らずにゐて、痛いとも思はぬ瘻も、人に障られると、痛を覺えるやうなものである。玉ちゃんはいつもの事だから、さ程驚きもせずに、又繪を見てゐる。

「それはあの人とあなたが、未亡人さんの處へ來た養子のやうになるとは、わたしも思つてはゐなくつてよ。年が寄つても氣が若くて、誰かと夫婦のやうにしてゐたいのです。それだから會計をどうしても自分でするといふのです。」

「それも間違つてゐる。いつも言つて聞せる通だ。會計なんぞといふものは何でもない。妻が會計をするといふのも、中以下の事

だ。大い内になれば、三太夫にもさせる。會計をするから妻さいだ、しないから妻さいでないなんといふ事はない。お前は來た當分には、勿論會計などがさせられるやうな人ではなかつた。お父様とうにねだつて、好すきな物を買へる丈買ふといふ癖が附いてゐたのだ。丸で預算を立てて物をするといふ考がなかつたのだ。此頃だいぶわか大分分つて來たやうだ。會計をさせられる様になるかも知れないが、お母様かあが樂たのしみにしてお出なさるものを、無理に取り上げるには及ばない。お母様かあの方で、もう面倒だからよすと仰やれば、先づおれが自分でする。さうして置いて、お前の氣質が段々直つて、當前に何でも話合が出来るやうになれば、お前にだつてさせないとは云はない。併し今のやうでは、當分お前の氣質が直らうとは思はれない。先せん

から會計をして入らつしやるお母様が、なる程あれなら任せられると仰やるやうにすれば好いではないか。謂はゞ素直に譲つて貰ふやうにすべきだ。それを戦争で敵の物を取るやうにしようとしてゐるのが間違つてゐる。」

「譲つて貰ふのではないでせう。あなたの月給でせう。わたしだつてそれを勝手にしようといふのではなくつてよ。あなたがなされば、わたしに相談をしてなされば、わたしだつて妻のやうでないと云ふもんですか。紀尾井町のお母様かあなんぞは、兄にいさんの月給なんぞにお構なすつたことはありやあしない。」

「そりやあ違ふ。紀尾井町のお父とうさんは財産家で、お前の兄にいさんが會社で取る月給は、兄にいさん夫婦の小づかひになれば好いのだか

ら、まあどうなつても好いと思つてお出なさるのだ。内にはおれの取る月給の外になんにもない。お母様かあがそれを預かつて、節儉をして下さるのだから、好いではないか。」

「いゝえ。それが餘計なお世話だわ。あなたの取つて來る月給なのでせう。あの人の御亭主は判任官で、なんにもなかつたのだから、あの人はあなたに食べさせて貰ふ丈で、おとなしくしてゐれば好いのだわ。人の物なんぞに手を出して。」

「そんな聞きくぐる苦しい事を言ふ。おれに誰が學資を出して大學を卒業させてくれたと思ふ。」

「そりやああなたが貸費生とかになる迄、少しは出したのでせう。それは親のする當前の事ですわ。あなたが今のやうに月給の取れ

るやうになつたのは、あなたの腕ぢやありませんか。内の兄にいさんなんぞは、學資はいくらでも出して貰つて、洋行までさせて貰つたけれど、博士になんぞなりやあしない。」

「學資を少し出して貰つたの、澤山出して貰つたのと、そんな勘定で、親の恩に輕重を附けることは出来ない。おれのお父とうさんが少し出すには、お前のお父さんが澤山出す何倍の骨が折れたか知れないのだ。なる程お前の兄にいさんは博士ではない。親がいくら學資を出しても、誰も皆學者になるといふものではない。人には向々がある。それに人の成功が、どれ丈生れついて、どれ丈人のお蔭で出来たかといふことは、どんなえらい學者でも極めることは出来ないのだ。生れついたといふのも又遺傳かも知れない。自分

の力で成功したから、親には恩がないといふことがあるものか。」
「えゝゝ。そんならたと恩にお着なさい。それはそれで宜しいとしても、此内に財産がいくらあるか、あなたの月給がどうなるのだから、少しもわたしに知らせないで置いて、あなたが亡くなりでもしたら、わたしと玉ちやんとはどうなるのです。」奥さんは論鋒を一轉した。伶俐な玉ちやんは聞耳を立てて、本を置いて立つて、唇のところ指を當てて、可哀い大い目を睜つて、二親を見比べてゐる。指をくはへてはならぬと、博士が教へてゐるので、へはせぬのである。

「財産は知れてゐるではないか。此家屋敷が、お父様の財産をみんなと、おれがその頃迄取つた月給とで出来た外に、不動産と

いつては、たつた五千圓でもしかありやあしない。おれの年俸は、講座給を入れて二千七百圓なのだ。それで此位な暮しをして、夏と冬とに、お前に六十圓づゝ着物の代を纏めて出して上げるのは、お母様かあが節儉して遣つて下さるから出来るのだ。」

「それはあなたには聞いてゐてよ。どうだか見ない事だから分りやあしない。あの人に任せて置いて、わたしや玉ちゃんがどんな目に逢ふか分りやあしない。」

「玉ちゃんくと云つてはいけない。子供が餘計な心配をする。おれは公證人を立てて、立派に遺言がしてあるから、お前や玉の困るやうな事はないのだ。」博士は玉ちゃんを見て、笑つて顎あごをしやくると、玉ちゃんはお母ちゃんかあの背せなか中まはをつて來て、博士に

抱かれた。

「その遺言の事だつて、公證人の役場の小使が、紀尾井町へ來る婆あやあの亭主なので、それでやつとわたしに知れたのだから變だわ。それはわたしなんぞの困るやうには書いてないでせう。どう書いてあつたつて、お父様とうがいふが、遺言状といふものは、そんなに確なものぢやあないといふことだわ。それにあの人が持つてゐるのぢやあなくつて。」

「お母様かあの處にはない。そりやあ遺言状の効力を失ふ場合もある。まあ出来る丈確實な方法を取つて置くといふ訣わけなのだ。勿論公平に書いた積だが、あれもお前かあがお母様かあにつらく當つて、お母様かあが、若しおれがどうかした時に、どうならうか知れないといふので、

心配して入らつしやるから、拵へることにしたのだ。馬鹿らしい。財産といふ程のものはないのだから、遺言状なんぞは一體入らないのだ。お父様とうが生きて入らつしやつて、おれの兄弟が内うちにゐた頃の事を考へて見ると、内ぢゆうで誰も死んだらどうの、金がどうのといふやうな事を考へてゐたものはないのだ。年寄は年の寄るのを忘れて、子供の事を思つてゐる。子供は勉強して、親を喜ばせるのを樂たのしみにしてゐる。金も何もありません。心と腕うでが財産なのだ。それで内ぢゆう揃つて、奮闘的生活をしてゐたのだ。その時は希望の光が家に満ちてゐて、親子兄弟が顔を合せれば笑わ聲こゑが起つたものだ。「博士は玉ちゃんを抱き緊めた。「玉なんぞは親の笑ふ聲を知らないのだ。」

奥さんもいつも言ふ丈の事をさらつてしまふと、暫くは黙つてゐる。元來無口むくちな性分せうぶんで、姫に來た頃、博士は寡言がお前の一長處だと云つた位である。玉ちやんは頬ほつぺたをお父とうさんの胸に押し附けて、目を半分開あいてお父とうさんを見て、すうくと息をしてゐる。一間まが又ひつそりする。時々置時計の音が耳にはいる。

奥さんは火鉢の炭を積んだり崩したりして、考へ込んでゐる。

頭の中は頗る混沌としてゐる。何事でも順序を立てて考へることは不得手であるのを、博士が論理で責めるから、半分夢中うげこで受う答たへをしてゐる中に、いつでも十六六指むさしのやうに詰められてしまふ。どうしたら此苦痛が脱せられるかと考へると、姫に來るとき、お父とうさんが、「嫌だと思つたら、いつでも歸つて來い」と云つた

ことを思ひ出す。いつそ最少し早く歸つてしまつたら好かつたか知らむと思つて見る。さうすると又、姫に来て三月程立つて、夫をつとと里へ往つたとき、お母様かあが、「お前はめつたに人になじむといふことの無い子だつたに、好く高山さんになじんだものだ」と云つたことを思ひ出す。どうも歸る訣わけにはいかなかつたのだと思ふ。今夫をつとを愛してゐるだらうかと、自ら問うて見る。夫をつとは好い男ではない。いつであつたか、「好い男いいは年を取ると損そこねるから、おれのやうな醜男子の方が得とくだ」と、夫をつとの云つたことがある。或時又「おれなんぞの顔は閱歴が段々に痕を刻み附けた顔で、親に生み附けて貰つた顔とは違ふ」と云つたこともある。何にしる嫌ではない。若し夫をつとを持ち更へて、その男が博士より嫌であつたら、ど

うしようと思ふ。二度目では大學教授位の位地の人を夫をに持つことはむつかしいかも知れぬとも思ふ。一轉して夫をの母をがさへしなければ好いのだと思ふ。どこぞへ往つてしまへば好い。夫をの姉の内へでも往けば好い。いや、あそこにも姑があるから、所詮往かれぬ。いつそ死んでしまへば好いと思ふ。かう思つて、自分で怖ろしい事を思ふとも何とも感ぜぬのを、不思議に思ふのである。

博士は右の手で玉ちゃんを押へ附けてゐるうちに、左の手に持つてゐる葉巻は、いつの間にか消えてゐる。玉ちゃんは好い心持だと見えて、いつまでも動かずにゐる。博士はかういふ事を思ひ出した。博士が大學へ通ふ道に穀物問屋がある。博士は手車はあるが、朝時間が早いと、運動の爲めに歩いて出勤することがある。

殊に此頃の寒い朝は、車に乗ると寒いといふので、度々歩く。あ
る日彼穀物問屋の前を通るとき、店に婆あさんのあるのに氣が附
いた。白髪が黄ばんで、手は澁紙を揉みくしやにしたやうな婆あ
さんである。その婆あさんが、その澁紙のやうな手の平に、ひとつ
撮程の赤小豆の屑を入れて、五味をよ選り出してゐる。博士はそ
れに氣が留まつて、一寸立ち留まつて見た。そしてかう思つた。
山のやうに積んである穀物をひ簸るのだから、屑は澤山出る。それ
をあの婆あさんが一撮程づゝ手に取つて、翳かすんだ目で五味をよ選り
出したところで、それが何の足たしになるのでもない。側には小僧が、
大いみ※でさつくとあふつてゐるのである。それでも婆あさんは
爲事しごとをしてゐると、自ら信じてゐるのであらう。主人はをかしく

思ふであらうに、小言も言はぬと見える。面白い事だと思つた。その後は此家の前を通る度に、見るともなしに見て通る。婆あさんは毎日五味を選よつてゐる。主人は果して小言を言はぬと見える。博士は今此婆あさんの事を思ひ出した。妻さいのやかましく言ふお母様の會計も、是非お母様かあにして貰はねばならぬのでは勿論ない。或は自分でする方が好いいかも知れぬ。併しお母様かあが家の爲めになると信じてする事であるのを、止やめさせるのは好くない。そんな事をすれば、彼穀物問屋の主人にも劣つた事をするといふものだ。お母様かあはかう云つてゐる。「あの姫さんに會計を渡したら、わたしは其日から、ちよいと何かでお足あしが入ることがあつても、頭を下げて往つて頼まねばならない。姫さんは此内へ來て、婚禮の日

に親類の杯をした時お辭儀をした切で、お辭儀といふものをした事のない人だ。餘所へ往かうが、歸つて來ようが挨拶をした事はない。そこへ往つてわたしが頭を下げるのはいかにもつらい。あんな人でさへなければ、姫さんに會計を渡すのは、貰はない前からの覺悟なのだから、とうにこつちから進んで渡してしまふのだ。その上來た當分の姫さんは、會計などをしようといふ風ではなかつた。今でもわたしのした方が、物いりは半分で濟む。」と斯う云つてゐる。お母様かあの云ふことは一々尤だ。お母様かあにお辭儀をしなければならんといふことは、初は優しく言ひ、後には叱つて直させようともして見たのだが、とう／＼だめであつた。妻さいに任せずに、自分で會計をすれば、お母様かあが姫に頭を下げるには及ばな

いやうなものではあるが、口を利かぬ姫に家政の相談は出来ない。節儉も無論お母様かあの方が上手だ。或はおれよりも上手かも知れぬ。固より穀物問屋の婆あさんの、手の平で豆よを選ぶのと、同日の談ではない。先づ／＼現状維持だと、博士はかう思つた。

奥さんは突然緘黙を破つて、「なんにしろひのえうま丙えと午ななのだから」

と、獨言のやうに云つた。これは博士の母君の干支である。博士は常談に、お母様かあは豪傑だ、奥參謀總長と一しよに生れたのだからと云つてゐるのである。奥さんは迷信家で、夫の母君の干支えとを氣にして、向うを尅殺せねば、自分が尅殺せられるといふやうな事を思つてゐる。これも antipathy の一つの原因である。これは

幕府末造の江戸の町に生れて育つた、紀尾井町のお母様かあの系統を

承けてゐるのである。金毘羅様を信しんかう向するなんでもこれから出てゐる。奥さんはお嬢さん時代に、紫紺の羽織を着て、紀尾井町の邸から、溜池を通つて、虎の門へ參詣するのであつた。目に立つて美しい娘であつたので、其頃の赤坂藝者は、別品の事を紫紺のお嬢さんにも負けないと云つたものである。

玉ちゃんはお父様とうに抱かれてゐるのに厭あきて來て、體からだをもぢり／＼させてゐたが、「あつちへ行く」と云ひ出した。裏門に近い土藏の側の小部屋に一人ひとりで住んでゐる、おばあ様の處へ行くのであらうか、それとも女中達の處へ行くのであらうか。此疑問は同時に博士夫婦の心に起る。博士は寂しい母君の處へ往けば好いと思ふ。奥さんはあの人の處に遣つてはならぬと思ふ。博士は黙つて

るるのに、奥さんは黙つてはゐぬ。

「どこへ行くのだい。」

「おばあ様のところへ行きたい。」

「あんな人のところへ往くのではありません。女中の處へ往つてお遊あそび。」

玉ちゃんはお父様とうの顔を一寸見て、しかたがないといふやうな顔をして、女中の方へ往つた。博士は言ふのは無益だとは思ひながら、丸で黙つてもえうをらぬ。

「お前は何とでも思つたり言つたりするが好いい。何も子供なににまで、あんな人だなんぞと云ふことはないではないか。」

「あんな人だからあんな人と云ふのだわ。あなたの側にひつ附い

てゐて話をするのは好すでせうが、子供の世話なんぞは大嫌なので
す。丸でああなたの女房氣取で。會計もする。側にもある。御飯の
お給仕をする。お湯を使ふ處を覗く。寐てゐる處を覗く。色氣違
が。」

博士はこらへてゐる。何か云へば、向うの肝癪が募るばかりで
ある。奥さんの言ふことと云つたら、會計の事であれば、母君
が博士に物を言ひたがるといふ事である。博士は會計の事を、奥
さんの議論の理性的方面と名づけて、母君に對する嫉妬を意志的
方面と名づけてゐる。奥さんの、博士と母君とに物を言はせまい
とするのが、嫉妬だといふことは、不思議にも紀尾井町のお父様
が最初に判断した。姫に來た當座に、どうも夫をつとと姑君とが話をす

るのが見てゐられぬので、席を起つと云ふことを、里へ歸つて話すと、「それは嫉妬だな」とお父様とうが道破したと云ふことである。藝者といふ動物は見るのも氣にくはぬといふ博士であるから、家の外には嫉妬をすべき因縁がない。小間使を置いても、様子の好い仲働を置いても、博士は焼餅を焼かせるやうな言語舉動をしたことがない。そこで母君が嫉妬の對象になつたのであらう。某將軍の奥さんは從卒に對する嫉妬が猛烈で、それが起る度に將軍は副官を呼びに遣つて取り抑へて貰ふといふ奇談がある。母君と雖、嫉妬の對象にならぬには限らぬのである。博士は、はゝあ、攻撃部署がまた意志的方面になつたなと思つたばかりで、黙つてじつと奥さんの顔を見てゐる。日に何遍となく繰り返される、印刷し

たやうな奥さんの詞でも、たま／＼内にて、半日の間たて續つゞけに聞いてみると、刺戟が加はつて來て、腦髓が負擔に堪へなくなつて來る。もう煙草を喫のむ氣にもなれぬのである。

かういふ時博士の黙つてゐるのが、奥さんには又不愉快でならぬ。奥さんが「何とか仰やいよ」と肉薄して來て、白く長い指が博士の手首に絡からんで來るのはかういふ時である。そこで奥さんが決戦を挑んで、髪を切るの咽を突くのだといふこともある。例の玉ちやんを連れてどこかへ往くと言ひ出すこともある。體と體とが相觸れて、妙な媾和になることもある。今日けふは朝早く一度爆裂のあつた跡なので、決戦にもならぬ。「どこかへ往く」問題も再びは提出しにくい。時刻が時刻である上に、姫に來て一二年の頃と

は違つて、妙な媾和にもなり兼ねる。そこで流石の奥さんも黙つてゐる。一間まは又ひつそりする。又置時計の音がする。

奥さんの頭あたまの中では、また考が前さきのとほりに、どうどうめぐりをしてゐる。夫をつとに別れるのも嫌な事だから、それを思ひ切つてすることは出来ない。姑君に頭を下げるのも嫌な事だから、それも思ひ切つてすることは出来ない。折々どこかへ行くなぞと云ふ時も、又歸つて來れば同じ事だと知り抜いてゐて云ふのである。或時は又こんな事も云ふ。「わたし又何かのお稽古に行くことにしたら好いいかと思ふわ」と云ひ出す。博士は始てこれを聞いたとき、なる程何か藝術に身を入れるやうになつたなら好よいかも知れぬと、半分程首肯して、さて奥さんの考を聞いて見て驚いた。奥さんは

何も藝術などをしようとは思はぬのである。お嬢さんの時に稽古に行つたのもさうであつた。日本繪の先生にも通つた。琴の師匠にも通つた。繪を書かうとも、琴を引かうとも思ふのではなかつた。只ゞお仕舞をして、車に乗つて、紀尾井町と其先生、其師匠のある町との間を、毎日往復するといふのが、所謂お稽古の概念なのであつた。今いふお稽古もそれである。博士は此事が分つたとき、そんな事なら、何も入費を掛けて、夫人の身となつては、多少の嫌もある藝人附合をしなくても、散歩をするが好よからうと云つた。博士は又一步を進めてかう云つた。「一體悪い癖なんぞがあるなら、それを土臺から直しに掛かるが好よいではないか。お前はどうかして、一寸それをぼかして過さうと云ふのだ。それは

下らない事だ。病氣で痛む處があれば、其病氣を直さねばならぬ。モルヒネで痛を止めて置かうといふやうな、姑息な事には賛成が出来ない。」とかう云つて、一切の palliativ の手段を排斥したのであつた。奥さんは又此お稽古の事を思ひ出してゐる。夫が散歩を代用にしろと云つたのは、甚だ不服である。奥さんは自然に對して何等の興味をも持つてをらぬ。姫に來た當座、博士は花なぞを持つて歸つて遣つたことがあるが、奥さんは少しも喜ばなかつた。それから「お前は月なぞを見て何とか思つた事があるかい」と問うて見た。奥さんは不審らしい顔をして、「いゝえ」と云ふのみであつた。さういふ訣わけだから、散歩をしたつて面白くないのも無理はない。町を歩いて窓の内に飾つてある物を見ても、

只ゞ見て面白いとは少しも思はぬ。「買はない位なら、見ない方が好いいわ」と横を向くのである。なる程散歩は嫌な筈である。そんなら何故なぜお稽古に通ふの丈が面白いかといふと、奥さんはどこか向うの方に、ある到着點をこしらへて置いて、そこまでぶら／＼と往つて來ることを望むのであつて、奥さんの經驗では、お稽古がよひ通の外にこれを實現すべき適當の手段がないのである。そこで奥さんの心が *palliativ* を要求するときには、いつもお稽古通といふことが提起せられるのである。そして此考の浮んで來るのは、奥さんの心が少し平穩になつた兆である。

博士は此時こんな事を考へてゐる。一體おれの妻のやうな女が又と一人ひとりあるだらうか。性欲の對象が妙な方角にそれるのを *per*

verseだ」と云つて、病的にする以上は、嫉妬の方角違になるのも病的ではあるまいか。人の聲に對する異様な反應なぞも、病的であるといふ證據になりはすまいか。こんな考は餘程早くから博士の胸に往來してゐる。それで博士がある時「お前は精神が變になつてゐるのだ」と云つたことがある。奥さんはそれを紀尾井町のお父^{とう}さんに話すと、「けしからん事を言ふ男だ、人を精神病者だと認めるといふのは容易ならぬ事だ、専門家に鑑定でもして貰つた上でなくては言はれない筈だ」と云つたのを、奥さんが歸つて話したこともある。無論精神病者とは認められまい。併し眞の精神病者と健康人との間に、限界状態といふやうなものがあひはすまいか。若し又精神の變調でないとすれば、心理上に此女をどう

解釋が出来よう。孝といふやうな固まつた概念のある國に、夫にをつと對して姑の事をあんな風に云つて何とも思はぬ女がどうして出來たのか、西洋の思想から見ても、母といふものは神聖なものになつてゐるから、夫に對して姑を侮辱しても好よいと思ふ女は先づあるまい。東西の歴史は勿論、小説を見ても、脚本を見ても、おれの妻のやうな女はない。これもあらゆる値踏ねぐみを踏み代へる今の時代の特有の産物か知らんと、博士はこんな風な事を思つてゐる。その中うちに臺所の方でことごとくと音がして來る。午ひるの食事の支度をすると見える。今に玉ちやんが、「papa, 御飯ですよ」と云つて、走つて來るであらう。今に母君が寂しい部屋から茶の間へ嫌はれに出て來られるであらう。

青空文庫情報

底本：「鷗外全集 第四卷」岩波書店

1972（昭和47）年2月22日発行

底本の親本：「昴 第三號」

1909（明治42）年3月1日

初出：「昴 第三號」

1909（明治42）年3月1日

※「往」と「徃」の混在は底本どおりです。

入力：相川良彦

校正：阿部哲也

2012年7月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

半日 森鷗外

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>